

ウィークリー・ブレット・オブ・ライフ

(2026年3月9日(月)～15日(日))

岸和田聖書教会

牧師 栗原純人

今週水曜日で終わります。民数記。でも、主の物語は続きます。

3月9日(月)

今日の聖書日課：民数記 35：1～8

レビ人に与える町々については、人を殺した者を逃れさせる六つの逃れの町がなければならない。また、このほかに、42の町を与えなければならない。

民数記 35：6

約束の地に入る直前のさまざまな準備。これまで、その境界線が示され、その相続地を12部族がくじを引いて受け取ることが命じられて来ました。今日の聖書日課には12部族それぞれがその所有となる相続地のうちから、居住のための町々をレビ人に与えるように、命じられています。それは放牧地でもありました。レビ人には相続地はない、と言われ続けていましたが、彼らとて「かすみを食って生きる」のではないのです。主は必要な糧とそのため土地をレビ人に与えました。

そのレビ人に与える町は、全部で48の町と言われていますが、その中の六つは冒頭の聖句。「人を殺した者を逃れさせる」町。「逃れの町」でした。誤って人を打ち殺してしまった殺人者を復讐者から守るための町です。これがレビ人に任されたことの意味を考えましょう。礼拝に仕えるレビ人は誤って人を打ち殺してしまった人を守るだけでなく、彼らが主を礼拝し続けることができるように支えたのです。どんな状況に置かれても人の生きる目的は主を礼拝すること。主の前で生きること。逃れの町は、私たちにそのことを教えてくれるのです。

3月10日(火)

今日の聖書日課：民数記 35：9～34

もし鉄の器具で人を打って死なせたなら、その人は殺人者である。その殺人者は必ず殺されなければならない。

民数記 35：16

「逃れの町」についての説明が続きます。最初から語られています。「逃れの町」とは「誤って人を打ち殺してしまった殺人者がそこに逃れることができるように」するための町(11)。つまり、誤ってではない、故意に人を打ち殺した者は、守られないのです。たしかに「誤って」してしまった者を血の復讐からをとする者の手から救い出すことが語られています(22～29)。しかし同時に、それと同じくらい、故意に人を殺した者は殺されなければならない、と言われています(16～21、30～34)。冒頭の聖句は、その初めのことば。非常にわかりやすい。

「人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。」(創世記9：6)。ノアの時代にすでに語られていたことです。この罪は赦されないのです。だからこそ、赦されないからこそ、神の御子が人の罪のために、身代わりにその罪を背負われた。今日の聖書日課にもキリストの十字架の恵みが示されているのです。

3月11日(水) 本日は祈祷会。朝10：30から教会で、19：30からはオンラインで。

今日の聖書日課：民数記 36：1～13

そこでモーセは、主の命により、イスラエルの子らに命じた。「ヨセフ族の訴えはもっともである。」

民数記最後の章、36章には、やはり約束の地に入る直前の出来事が記されています。しかしここは、民の間にあった問題から始まっています。それは、かつて27章のところで、マナセ族の中のツェロフハデの娘たちが、自分たちの父に息子がいないゆえに、自分たちの所有地が削られないよう、所有地を与えてほしいと言いました(27：1～4)。するとこれを聞いた主がモーセに言いま

した。「ツエロフハデの娘たちの言い分はもっともだ…」(27:7)。そして息子がいなくても彼女たちにその所有地を受け継がせるよう命じられました。

今日の36章は、それを聞いたマナセ族のかしらたちがモーセに駆け寄ったところ。もし彼女たちが別の部族にと嫁いだなら、その相続地は最終的には先祖の相続地から差し引かれ、他の部族に移ってしまう、と。そこで冒頭の聖句。そして、このときイスラエルの相続地を受け継ぐ娘はみな、その父の部族に属する氏族の一人に嫁がなければならない、ということが決められました(8)。

あのときも、そしてここでも、大切なのは主に尋ね、主が答えられたということ。主は、私たちの言い分も聞いてくださり、そしてご自身のみこころをみことばをもって示してくださるのです。それが、私たちが主の前で生きるということなのです。

3月12日(木)

今日の聖書日課：ローマ1:1~7

—この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。

ローマ1:2~4

今日から新約聖書「ローマ人への手紙」を読んでいます。書いたのは使徒パウロ(1)。彼は自分は「神の福音のために選び出され、使徒として召された」と言います(1)。そして福音とは何か？それが冒頭の聖句。

福音は、御子に関するもの。福音は単なる良い教えではありません。人生訓でもありません。何が良い知らせなのか？それは御子イエス・キリストという神であり、人であるお方。イエスさまが福音なのです。このお方と交わることが、私たちのいのちなのです。

3月13日(金)

今日の聖書日課：ローマ1:8~17

というより、あなたがた間であって、あなたがたと私の互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。

ローマ1:12

福音である御子イエス・キリストの使徒パウロは、ローマにいる聖徒たちの信仰の様子を聞いて神に感謝していました。そして、いつか彼らのところに行きたい、と切に願っていました。それは「御霊の賜物をいくらかでも分け与えて、あなたがたを強くしたいからです。」(11)。彼らを見ことばによって教え励ましたい。しかしパウロは言うのです。冒頭の聖句。パウロは決して「上から目線」で教えてあげようとしたではありません。彼は「互いの信仰によって、ともに励ましを受けたい」と考えていました。

牧師が、信徒がお互いの信仰によって励まされること。これが健全な教会です。私はみなさんの信仰から励まされているし、みなさんを励ましたいと願っています。

3月14日(土)

今日の聖書日課：ローマ1:18~32

神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。

ローマ1:20

そうです。弁解の余地はないのです。しかし「弁解の余地はありません」ということばが語られなければ、人はそのことに気づかない。やはりみことばが必要なのです。

3月15日(日)

今日の礼拝説教箇所：ヨハネ19:16~24「私たちがまだ罪人であったときに」

今日から三回にわたって、ヨハネ福音書のイエスの十字架での出来事を追っていきます。